日本民家園だより

特集 暮らしと道具

vol. 96

企画展「倉に眠る道具たち
－日本民家園新収蔵資料展－」

2022年7月1日（金）～11月27日（日）

伊藤家の倉　撮影：令和4（2022）年4月

倉に眠る道具たち
－日本民家園新収蔵資料展－

はじめに

国指定重要文化財・旧伊藤家住宅は、日本民家園設立のきっかけとなった家です。このたび当園では、川崎市麻生区金程（かなほど）に現在もお住まいのご家族より新たに260点に及ぶ資料をご寄贈いただきました。生業や衣食住に関わる数々の道具類は同家の倉で保管されていたもので、伊藤家、さらには多摩丘陵の農家の暮らしを知る上で貴重なものです。この稿では今回の展示でご紹介する品々の背景として、まず伊藤家の生活についてご紹介します。

1　伊藤家の生業

（1）稲作

江戸時代から明治22（1889）年まで、金程は一つの村でした。伊藤家はこの村で名主も務めた家柄です。

金程では稲作に湧き水を利用しましたが水はけが悪く、「ドブッタ」と呼ばれる田が少なくありませんでした。土が泥水のようにゆるいため、深さが腰まであっても足を抜かずに移動できたそうです。このため竹を利用した吸水管を埋めて水を抜く暗渠排水（あんきょはいすい）を行い、ようやく農業機械を入れられるようになりました。

種籾（たねもみ）をまくモミフリは5月5日の節句の日と決まっていました。田植えは6月です。苗を準備する苗取りは女性、田植えは主に男性の仕事でした。稲刈りは麦まきと秋の養蚕が終わってから行うため毎年遅く、12月頃になりました。この時期になると稲が枯れて倒れているため、起こしながら刈る分、手間がかかったそうです。

（2）養蚕

伊藤家では米も作っていましたが、近代に入ってからの主な現金収入源は養蚕であり、毎年春と秋の2回養蚕を行っていました。

春蚕（はるご）は4月から5月、桑の芽が出はじめる頃始まります。養蚕組合から蚕の卵の付いた種紙（たねがみ）を買い、孵化（ふか）させますが、まだ寒い日もあるため蚕が小さいうちは部屋の隙間を目張りしました。飼育場所は座敷が中心でした。しかし、成長すると中二階や中三階も使い、さらには家の南側に張った大きな天幕の下でも飼育しました。蚕は桑の葉を大量に食べます。小さいうちは葉の柔らかいところだけ刻んで与えますが、成長すると枝ごと与えます。フンや食べかすも捨てることはせず、集めて肥料にしました。

伊藤家には土蔵に似た乾燥庫があり、繭は炭火の熱で中のサナギを処理してから出荷しました。

（3）畑作

昭和18（1943）年、太平洋戦争下の食糧不足に対応して「食糧増産応急対策要綱」が閣議決定されると、伊藤家でも養蚕を止めて桑を切り、切り株のあいだにサツマイモや麦を植えました。これが養蚕に替わる主要な現金収入源となります。

サツマイモの栽培は冬、山から落葉を運び「サツマグラ」と呼ばれる10坪ほどの場所に積み上げることから始まります。これを踏み込んでおくと発酵して熱を持つため、ここに種イモを植えて発芽させます。この作業を「トコツキ」といい、毎年4月8日頃行いました。続いて5月末から6月初め、芽が出た部分を切り取り苗田に植えます。ここで1カ月育てた後、刈り入れ前の小麦のあいだに植えていきました。小麦の刈り入れを経て11月になるとサツマイモの収穫です。それが終わると、同じ畑に小麦をまくのです。

このように収穫期のずれを利用し、伊藤家では1つの畑でサツマイモと小麦を平行して栽培しました。

戦後の食糧難が終わると、伊藤家では果樹栽培に力

ツミオケ　種籾を直接田にまくのに用いた

サイセイキ（蚕種催青箱）　蚕の孵化器

ランプ

伊藤家の屋敷　中央が倉、左は堆肥舎、右が主屋（昭和 34 年、関口欣也氏撮影）

を入れました。初めはモモ、続いてナシ、このほか地元特産の禅寺丸柿は古くから栽培し、新宿の淀橋市場に出荷していました。

2　伊藤家の暮らし

伊藤家では朝は 5 時頃起き、朝食前に草刈りや馬のエサやりをしました。夕方は夏は 5 時半頃まで農作業をしましたが、冬は日が暮れると家に戻り、縄ないや草履作りなどをしました。就寝は 10 時頃です。布団の中身は木綿わたで、真綿は使いませんでした。

伊藤家では養蚕を営んでいましたが、自家用に糸を取ることはなく、出荷できないくず繭を真綿にしてどてらなどに利用するだけでした。普段着は木綿です。布は家で織る場合と購入する場合があり、服に仕立てるのは雨の日か夜でした。

水は湧き水を引いていたほか、井戸もありました。湧き水は炊事と風呂に、井戸水は洗濯などに使っていました。主食は麦飯です。昭和に入った頃は、麦が 7 割、白米が 3 割でした。

金程では毎月 1 日、15 日の午後は休みでした。この日は白米を炊いたり、ぼた餅を作ったりしたそうです。

3　伊藤家の倉

伊藤家の倉に建築記録や棟札はありません。しかし「嘉永七（1854）甲寅年　七月吉日　金程村　寅蔵求」と記された梯子段が残されており、これが建築年代を示すものと考えられています。

この倉は数度にわたり改修が加えられました。まず大正 3（1914）年には裏側にひさしが設けられました。「八畳ひさし」と呼ばれる非常に大きなもので、周囲に戸を入れて蚕室として使われました。次に改修が加えられたのは昭和 24（1949）年です。内部が改造されたほか、屋根もこのとき茅葺きから瓦葺きに改められたようです。さらに、主屋が民家園に移築された後の昭和 58（1983）年には、曳家をして場所を移した上、全面的な改修が加えられました。

伊藤家では、収穫した米はまず八畳ひさしに置き、籾すりをして倉にしまいました。倉の 1 階には一年分の米俵のほか、小麦などの穀類がたくさん積んであったそうです。一方、2 階には衣類などが保管されていました。倉に関わる行事としては、毎年 1 月 11 日の「クラビラキ」があります。この日は一日中扉を開けておき、中に白いご飯、油揚げ、お茶をお盆にのせて供え、灯明を上げました。

4　その他の新収蔵資料

今回の展示では伊藤家の資料と合わせ、近年ご寄贈いただいた 2 種類の生業用具をご紹介します。

（1）宮大工道具

宮大工とは、神社仏閣の建築や補修に携わる大工の

馬の目皿

ヒバチ

ヤナギダル　婚礼用

ことをいいます。こうした建物は一般的な建築物と異なり伝統的な木組み工法によって建てられるため、より高い建築技術が要求されます。道具の種類や数も多く、その全てを使いこなす必要がありました。

今回ご寄贈くださった島田安雄さんの祖父、豊次郎さんは、栃木県日光市で宮大工をしていました。重要文化財に指定されている神橋（しんきょう）の修理にも携わり、「クモの巣は出来ないがあとのものは出来る」というほど腕が良かったそうです。豊次郎さんは仕事を辞めた後も道具を大切にし、手入れを施した状態で保管していました。内丸鉋（うちまるがんな）、外丸鉋（そとまるがんな）、際鉋（きわがんな）、脇取鉋（わきとりがんな）、だぼ決り鉋（だぼじゃくりがんな）など、使用する箇所によって使い分けるカンナが特徴的で、中でも目を引くのが五寸鉋（ごすんがんな）と呼ばれる巨大なカンナです。刃幅が 15cm 以上あるこのカンナは、よほど腕の立つ職人でない限り実際の現場では使いこなすことができなかったそうです。

（2）伊勢型紙製作用具

布地に型紙で柄を染めることを「型染（かたぞ）め」といいます。伝統的な型紙には柿渋（かきしぶ）を塗り重ねた和紙が使用されており、ここに彫刻刀に似た刃物でさまざまな柄を彫り込んでいきます。こうした型紙の産地として最も有名なのが三重県で、同地で製作される型紙は「伊勢型紙」として知られています。

今回ご寄贈くださった稲垣圭祐さんの曾祖父、光雄さんは、京都での修行を経て三重県津市で伊勢型紙の製作を行っていました。この経歴から京友禅（ゆうぜん）向けの仕事が中心だったそうです。光雄さんが「コガタン（小刀）」と呼んでいた製作用の刃物は、用いる技法によって形に違いがあります。錐（きり）彫りという技法で使用されるものの刃先は一見針のように見えますが、薄い鋼板を半円筒状に曲げてあります。これを回転させることで丸い穴を彫り出すのです。道具彫りという技法で使用されるものの刃先は 2 枚の鋼板を合わせて四角や扇、紡錘（ぼうすい）などの形にしてあります。これを突くことでそうした形を彫り抜くのです。いずれも非常に繊細な技法で、このような穴を無数に彫り上げることでようやく一枚の型紙が完成しました。

おわりに

伊藤家では先祖の遺したごく普通の生活用具の価値に早くから気付き、前当主酉造さん、現当主廣一さんと二代にわたり倉の中で大切に保管してきました。それらがどれほど大切にされてきたかは、品物一点一点に札が付けられ、名称や用途が記されていたこと、さらにはそれら全てが和紙をとじた帳面に手書きで記され、いわば資料台帳が備えられていたことからも明らかでしょう。宮大工道具も伊勢型紙製作用具も、使い手が亡くなられた後、同じようにご家族が大切に保管してきたものです。この小さな展示が、先人たちが残したものを伝える意味を振り返るきっかけとなれば、保管を引き継ぐ当園にとっても望外の喜びです。

（渋谷卓男）

五寸鉋

コガタン（小刀）　道具彫り用

日本民家園だより vol.96　　発行：令和 4（2022）年 7 月 1 日

川崎市立日本民家園　URL https://www.nihonminkaen.jp/

〒 214-0032　川崎市多摩区枡形 7-1-1　TEL 044-922-2181　FAX 044-934-8652

交　　通　小田急線「向ヶ丘遊園」駅下車南口より徒歩 13 分

開園時間　［3 月～ 10 月］9 時 30 分～ 17 時　［11 月～ 2 月］9 時 30 分～ 16 時 30 分（入園は閉園 30 分前まで）

休 園 日　毎週月曜日（祝日の場合は開園）、祝日の翌日（土日・祝日の場合は開園）、年末年始　※臨時休園あり

入 園 料　一般 500 円、高校・大学生 300 円（要証明書）

65 歳以上 300 円（川崎市在住の方無料、要証明書）、中学生以下無料